

つながりの中でくらす
望まれた人として生きる
自分らしく生きていく



No. 28

2011年4月発行

東北関東大震災で、被害を受けられた方々、
不自由な生活をされておられる方々に、
心からお見舞いを申し上げます。

お亡くなりになった方々のご冥福をお祈りします。

3団体合同企画＊ぼっちや大会春の陣 みんなでぼっちやっちや～！

自立生活センター・あるる + 大工大ボランティア教育研究会 + ほっぷ

2011年3月29日(火) 13:30～15:30

会場：大阪市立都島区民センター ホール

参加者：48名 + 応援14名

自立生活センター・あるると大阪工業大学ボランティア教育研究会との3回目の合同企画、ぼっちや大会を開催しました。今回は、都島区民センターのホールを4つに区切って、ぼっちやに加え、風船バレー、魚釣りゲーム、ダッカーリング（ダーツとカーリングを合わせたもの）の4種目を行い、16グループに分かれて競いました。1歳のお子さん、17歳の高校生が3名、そして、20代から50代と幅広い年齢の方々が参加してくださいました。年齢に関係なく、障害の有無や種別に関係なく、真剣勝負！今回は、応援団の参加もあり、あちこちで歓声や笑い声があがってにぎやかな大会となりました。都島区民センター前の桜は咲き始めており、暖かな陽ざしの日で、ひと足早く春を感じました。

3回目となった3団体合同企画イベント。今後も続けていきますので、「未体験」のみなさん、次回はぜひご参加くださいね。



障害児の自立に向けての社会生活体験事業

【独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業】

社会生活体験プログラムⅢ

クッキング！

～ 調べる、買う、調理する～

障害をもつ中高生を対象に、自立に向けての体験を広げることがを目的に実施している「社会生活体験事業」では、1月に「クッキング！ ～調べる、買う、調理する～」の活動を行いました。ほうぶでは、毎年、「余暇の充実」を目的としたクッキングのイベントを開催してきましたが、今回は「自立に向けた支援」のため、メニューを決めたり、材料を選んだりするところから活動プログラムに取り入れ、スーパーの下見にも行きました。調理の時には、それぞれの子どもができることを工夫しながら取り組めるようにと企画しました。旭区内にある大阪工業大学のボランティアサークルの学生さんたちと一緒に企画し、運営も中心になって活動してもらいました。子どもに近い視点で企画し、材料の絵や調理手順の紙芝居などの準備、ゆっくりしたペースでの進行と、とても良い取り組みになったと感じています。社会人ボランティアや自立生活センターのスタッフのサポートで、子ども同士、そして、様々な大学の学生ボランティアたちと関係を深めていくことができるよう、グループワークを大切にしながら活動に取り組みました。

また、食中毒やインフルエンザなどの予防対策をスタッフで十分に検討し準備しました。調理の時には、安全面に考慮しながら、子ども達がたくさんのチャレンジができるよう見守り、サポートしました。

協力：大阪工業大学ボランティア教育研究会、障害者自立生活センター・スクラム

第1回 メニューを考えよう

日時：2011年1月15日(土)14:00～16:00

会場：大阪市立旭区民センター 集会室1

参加者：子ども5名、学生ボランティア8名、
社会人ボランティア1名、スクラムスタッフ2名

子どもそれぞれに担当のボランティアが寄り添い、進行を大工大ボランティアが行い、スタッフ（スクラム・社会人ボランティア・ほうぶ）が見守る形で行ないました。子ども一人ひとりのもつ力が異なるので、写真を見ながらメニューを選択するようにしましたが、準備したメニューにないものが作りたくて譲れない子ども、写真を選んだのに料理が出てこなくて発表に混乱する子ども（注文したと理解していて）、作りたいメニューの写真を嬉しそうに抱える子ども、あまり関心を示さない子どもなど、いろいろな反応がありました。話し合いをして、グループ毎にメニューを決め、2種類のメニューを作ることにしました。グループ活動を行う中で、それぞれの思いを受けとめ、要求に折り合いをつけたり、納得しながら話し合って決めていく体験や、仲間との関係づくりなど、子どもたちにとっても、スタッフやボランティアにとっても学びの場となりました。

<活動内容>

- ・ 出会おう！知り合おう！（全員で自己紹介）

～2グループに分かれて～

- ・ どんなメニューにしようかな？

写真を見ながら、それぞれが選択する。

グループ毎にメニューを決めて発表する。

- ・ 材料は何か？

材料の写真を見ながら、必要な材料を選択する。

★ どのメニューにしようかな？ では、以下から選択してもらった

・ クリームシチュー、 ・ グラタン、 ・ カレー、

・ 焼きそば、 ・ 豚汁&ご飯

(デザート) ・ ホットケーキ、 ・ クッキー、 ・ どら焼き

結果は ー 以下に決定。

Aグループは、グラタン、クッキー

Bグループは、豚汁&ご飯、どら焼き



<ボランティアの振り返りから>

- ・ 楽しそうに笑顔でいることが多かったのですが、途中で泣き出してしまった時は対応に戸惑い、スタッフに助けってもらった。少ししたら落ち着いたので良かった。
- ・ 自分から意見を言うことがない子どもでしたが、「～か？」とこちらから聞くようにするとうなずいてくれ、思いを確認できた。
- ・ たくさんのメニューから選ぶことは難しくても、二者択一で選んでいくことができた。自分で作りたいものを通そうという意思がしっかりしている子もいて驚いた。皆で楽しそうに材料を選ぶ姿がほほえましかった。

第2回 スーパーを探険

日 時：2011年1月22日(土)13:30～15:30

会 場：大阪市立旭区民センター 調理実習室

参加者：子ども6名、学生ボランティア8名、社会人ボランティア1名、
スクラムスタッフ2名、ヘルパー1名

過去にスーパーで怖い思いをした体験から現在も苦手意識をもっていてスーパーに入れそうにない子ども、スーパーが苦手な子ども、材料ではなく自分の欲しいものに突進していきそうな子ども、いろんなハプニングを予想しながらのスーパー探検でした。スーパーの苦手な子どもは、友達と一緒にだったからか、すんなりと買い物をすることができました。スーパーに入れないのではと心配をしていた子どもは、入店後しばらくすると耳をふさぐなどの緊張がみられ、「出ようか？」と尋ねると大きく頷いたので、スーパーの前で友達の買い物を待つことにしました。店の前を通ることもしんどかった子どもが、店先で寒さをこらえて友達を待つ姿に、「みんなと一緒に」という思いを感じました。バレンタインデー前のため、たくさんのチョコレートが並んでいて、それに突進していった女子達がいる、

ほほえましい光景でした。

当日、同センターで開催されていた「旭区民文化の集い」で購入した近隣の作業所のクッキーとお茶で、おやつタイムを楽しみました。おやつやお茶を前にして、前回とは違った子ども達の一面が見られました。おやつタイムという比較的自由な時間の中で、グループのみんなで話をしたり、さまざまなやりとりがあったりして、楽しみながら互いに関係を作っていくことができたと感じました。

<活動内容>

- ・ メニューの確認（前回欠席者にA Bからメニューを選択してもらい、グループ分け）
～2グループに分かれて～
- ・ 材料の確認
材料の写真をしながら必要な材料を確認する
- ・ スーパー探検
スーパーに行き、材料の確認
- ・ おやつタイム（交流）
- ・ 料理手順や使用器具を考える



<ボランティアの振り返りから>

- ・ 同じグループの子ども同士が仲良く活動できて良かった。スーパーで、バレンタインのチョコを見つけて突進していったのを見て「女の子だなあ」とうれしく思った。
- ・ Aくんは、スーパーにトラウマがあるようで、スーパーでは、耳をふさいで嫌がっていたので、先に出て、店の前で皆を待った。次回は、買い物をしないといけないので、活動後にお母さんと方法を相談した。おやつのクッキーを美味しそうに食べていたが、お母さんによると、それは珍しいとのこと。嬉しく思った。
- ・ 最初、自己紹介がうまくできずへこんでしまった。その後、担当の子ども（言葉が話せない子ども）のコミュニケーションはどんな感じなんだろうと注意した。人それぞれのコミュニケーションの取り方があり、自分が話をする時にどんなふうの人に話しているのかと思った。自分のコミュニケーションの取り方を見つめなおそうと思った。

第3回 買い物&クッキング

日時：2011年1月29日(土)11:00～15:00

会場：大阪市立旭区民センター 調理実習室

参加者：子ども8名、学生ボランティア11名、スクラムスタッフ1名、ヘルパー1名

前回、スーパーに入るのがしんどかったAくんは、友達と一緒に〇〇を買うという「目的」を明確にして行ったためか、すんなりと入店し買い物をすることができました。昨年は食べる時のみ座って、調理に参加しなかったBくんは、今回、調理の作業が変わるごとに参加できました。Bくんなりに調理の進行状況を見ながら、次の作業になりそうな頃に戻ってきて参加していきました。お米の計量カップの取手に手が入らなくて困っているCちゃんと学生さん。傍らにいた学生さんが、カップの底をそっと持ってきてくれ、お米をしっかりとカップに入れて計量できて満足気でした。やりたい気持ちを形にしようとする思い

があちこちにみられました。

「指導する・される」という関係がないクッキング。成功と失敗、工夫するおもしろさ、できないことを形にする、互いが互いを思いやり、目配りし気配りする姿があります。だからこそ、できた料理はより美味しい。メニュー選択からスーパーの下見、クッキングと、学生と子どもたちがかかわってきた成果もありました。自分でしたいこと、考えたことが、クッキーやグラタン、ご飯と豚汁にどらやきという形になりました。子どもたちもまた学生さんを支えていたと感じます。自分から考える力は、体験の積み重ねの中で育っていると感じました。

<活動内容> ~4グループに分かれて~

- ・ メニューの確認&材料の確認
 - Aグループ (グラタン、クッキー)
 - Bグループ (豚汁&ご飯、どらやき)
- ・ 買い物
- ・ 調理手順の確認 (紙芝居を使用して説明)
- ・ 調理
- ・ 食事
- ・ 片づけ 余ったクッキーをラッピングして持ち帰り



<ボランティアの振り返りから>

- ・ 初めての参加だったが、コミュニケーションをとるためには、もっと時間が必要だと感じた。担当したDくんが優しく、スーパーではそっと荷物を持ってくれたりして言葉は無いけれど、思いが伝わってきた。
- ・ 一生懸命に料理に取り組んでいた。食材を切ったり、ネギを入れたり、とても楽しそうな様子だった。買い物では、牛乳を取ってカゴに入れて、2回目の材料の確認が役に立った。
- ・ 自ら進んで積極的に調理をしてくれた。でも、刃物(包丁)をどう扱わせるかは難しく感じた。包丁を使う時、手を添えて2人で切っていたボランティアもいて、工夫していると思った。
- ・ 子どもたちが元気で張り切って、次々とどんどん先に行こうとして、止めることもあった。順番を守る大切さを感じてくれたと思う。全体の進行だったので、皆の様子をじっくりと見ることができ良かった。
- ・ スーパーで店員さんに「もうかりまっか？」のしぐさをして楽しんでいた。調理は「やる？」と聞くとやってくれたが、一つひとつの調理は長続き



はしなかった。「おなかすいた」の仕草を何度もして、一番に食べ始めました。

- ・今回は、担当の子どもという枠を超えて、グループ単位で多くのコミュニケーションを取りながら進めることができたと思う。同じグループの子どもみんなに気を配り、声をかけることができていた。子どもがどこまでできるか手探りで、危険な場面もあったかもしれないが、ボランティアみんなが注意していて、子どもにとっては新たな挑戦ができたかもしれないと思った。



社会生活体験プログラムⅢ「クッキング！」

第1回～第3回を通して

<保護者アンケートから>

- ・作ったクッキーをお土産にもらい、帰ってくるとすぐに渡してくれました。「作った？」と聞くと、「作った、食べた」と嬉しそうに言っていました。みんなと作ったり、買い物に行ったりするのは楽しいと思います。朝から「クッキング！」と言って準備をして、私の用事がすむのを待っていました。
- ・作った料理をどれくらい食べたのか、報告書には書かれていなかったのですが、お土産に持ち帰ったクッキーも「食べる！」と言って、自分で食べていたので、問題なく食事ができたのかなと思います。自分が食べ慣れたおやつ以外、なかなか手を出さないので、手作りクッキーを食べている姿に驚きました。まだまだ、自立に向けたスキルアップには程遠いですが、ようやく「自分たちで料理したものを食べる楽しみに気づいたのでは」と嬉しく感じました。
- ・帰宅して子どもが「たまご」と言ってくれました。3つも割って成功したことが楽しかったのでしょう。表情やようすを見ながら、子どもがやりたいことをやらせてもらえたようです。食べれるものが少なく、調理に参加することをためらっていたのですが、参加して良かったです。
- ・2回目でスーパーに下見に行き、3回目に買い出しに行ったことがとてもよかったと思います。
- ・何度目かの参加で、細かい作業も上手にできた様子なので少し成長を感じました。
- ・包丁も持てず、自分一人では作業ができない子ですが、ボランティアと一緒に包丁を持って調理できたようで、良かったです。作った料理をたくさん食べたようで、楽しかったのだなと思いました。

<ボランティアの感想から>

- ・毎年、クッキングの活動に参加してきたが、知り合いが増えていくのがうれしく、また、続けることの大切さを知ることができた。
- ・仕事、おしゃれ、クッキングと、すべての活動に参加したことで、子どもたちのことが良くわかり、積み上げを実感することができた。
- ・去年のクッキングでは、どこまでしてもらえばいいかわからず、子どもに振り回されてあまり調理ができず、お母さんからのコメントにも反省しきりでした。今年はその反省をいかし、今回は、夏の「しごと体験」でもかかわっていたので、コミュニケーションが取れたと思いました。友達が調理している時は、声をかけて無理強いしないよ

う参加を促してサポートできたと思います。今回は運営も行って大変でしたが、昨年より確実に充実していたし楽しかったです。

- ・ 回を重ねるごとに、初めは少し緊張していたボランティアと子ども達の雰囲気がやわらかくなっていくのを感じました。少しずつゆっくりとプログラムを進めていくことに大きな意味があったと思います。また、学生ボランティアが中心になって進行することも、自然な関係性を築くことができたのではないかと思います。その分、満足できなかったりしんどくなった部分もあるかもしれません。そういう部分もひっくるめて、ボランティアも子どもも次につなげていければいいなと思いました。
- ・ 10代の子どものILP、それを学生さんたちが一緒に考えて作っていくということは、お互いにとって良い体験になると思いました。見守りという位置で参加させていただく難しさも感じました(距離感など)。回を重ねていく中で、学生さんのアプローチの仕方が変わっていくのがわかりました。

保護者研修会 2010年度 第2回

子どもの将来の暮らしを考えよう

日 時：2011年1月29(土)11:00~15:00

会 場： 大阪市立旭区民センター 集会室3

参加者：保護者12名、関係者1名、中学生本人1名

子どもの将来の暮らしを考える機会とするために、障害当事者3人とサポーターの方に話をさせていただき、その後、全員で意見交換をしました。

初めに、生野区の「出発のなかまの会」から障害当事者のお二人にグループホームでの生活のようすをたくさんのおいしい写真から話していただきました。グループホームAで18年暮らしているBさんの写真はウェディングドレスでした。自分で買った指輪とブーケで、海老フライを作って皆を招待したそうです。「ケーキ入刀も」と楽しそうでした。夕食後の皿の片づけはBさんの担当だそうです。やりたいことをホームの仲間や支援者と楽しんでいるようすが伝わりました。グループホームAは女性4人で暮らしていて、全身性の障害で医療的ケアが必要な方もいらっしゃるとのこと。Bさんは、高校卒業後より民間保育所(0~2歳)で保母助手の仕事をしておられ、園長よりベテランです。趣味はベリーダンスだそうです。素敵な衣装の写真も見せていただきました。

グループホームCで暮らすDさんは、5年前から始めている「c a f e ・ D」の本格コーヒーを参加者にふるまってくれました。紙コップもDオリジナルの素敵なハンコが押されていました。グループホームCは男性5人で暮らしているとのこと。近くの喫茶店に何年も通っていて、マスターとママさんが新人ヘルパーに助言することもあるそうです。また、行きつけの洋食屋さんもあるそうです。部屋でジャズを聞きながら



コーヒーを入れてくつろいでおられるようです。仕事は作業所Eに行かれています。出発のなかまの会には2つの作業所があり、合同で体育館を借りてスポーツを楽しむこともあると、サポーターのFさんがお話してくださいました。Dさんもまた、良い仲間と良い支援者に囲まれていると感じました。二人の仕事、余暇活動、親との関係についても、支援者のGさんがBさんの言葉をうまく引き出しながら、伝えてくれました。

次に自立生活センター・あるるのHさんに、I市の親元を離れてJ区で自立生活を始めるまでの話をしていただきました。高校生の時に脳内出血で倒れ、病院のベッドで目覚めたときは、話せない歩けない食べられない身体だったそうです。病院生活、自宅療養、その後のリハビリ入所中に、あるるの仲間と出会いました。ピアカウンセリングの講座を受けるうちに、だんだん一人暮らしをしたいという気持ちになりました。親は当然心配します。反対されましたが、説得して自立生活を始めました。初めはしょっちゅう電話やメールをしてきていた親も、今は「(私を) ほったらかし」にしてくれているので、「楽になった」と話してくれました。作業所にしばらく通い、現在は、あるるのスタッフとして週3日仕事をしているそうです。今は、ちゃんと仕事できているか自信がないけど、いつか、入院している人のILP(自立生活プログラムの支援)をやったり、地域生活の支援をしたり、「Hちゃんに話を聞いてもらいたいな」と思えるような人になりたいと、夢を語ってくださいました。

最後に自立生活センター・おおさかひがしのヘルプセンター・ゆうのKさんから、ヘルパー派遣の仕事の立場からの話がありました。「制度の限界を感じる」として、自立生活のために必要な長時間の見守りが派遣事業所としてできない現状や、子どもの支援をしていて感じたことなどを話してくれました。子どもの支援をしながら、進路の選択肢がないことや就労は作業所で良いのか、など多くのジレンマを感じるとのことでした。障害者が隔離されることのない社会になってほしいと話してくださいました。

お昼ごはんを食べながら、参加した親たちが自己紹介をしました。その後、質問や意見の交流の時間をもちました。

- ・ 自立させる時期っていつなのでしょう？ ⇒ 年齢ではないでしょうね。出発のなかまでは、体験入居をしている。出会いが積み重なって自立になるというか。一人暮らしすることだけが自立ではない。
- ・ 自立のために親はどうしたらいいんでしょう？ ⇒ 親は自分の気持ちを言い続けてもらいたい。支援を考えていくために、敏感になっていかなければ。
- ・ 自尊感情を育てるためには？ ⇒ 一緒に考えていってください。

最後に講師の方々に、「ほうぶさん、連携していきましょう」と言っていただいて、意見交換を終わりました。

<アンケートから>

- ・ 自立すること、充実した生活を送ってほしいので、そのためにどうしたらいいか勉強になりました。もっとこれからも学んでいきたいです。
- ・ 自立、親元を離れての生活、もうあまり遠くない将来の話になりました。障害のある人とかわることで本人主体に考えようとして考えてくれている人達にまた出会えました。そして、そんな環境で生活している人達の楽しそうなようすに、私はワクワク

として満たされた気持ちになりました。いつか子どもの楽しそうに生活しているようすが見られる日を楽しみにしています。

- ・ 自立ってなんだろう？は、難しい問いで、これからもいろんな視点で考えていかなければと改めて思いました。
- ・ まだ親離れができない年齢ですが、遠い将来の希望を持ってました。
- ・ グループホームで過ごしているようすが、いきいきとして、精神的に豊かな生活を送っていらっしゃるなあと思いました。家が好きで、家族が好きで、家族以外との宿泊を嫌がる子なので、いつか自立したいと思ってくれる日が来るのかなと心配していたのですが、ILPなるものがあり、無理なく親子ともども、徐々に自立に向けて準備できることがわかって、ほんの少し安心しました。
- ・ 映像(写真)を見ながら説明をいただいたので、わかりやすかった。また、体験を話していただいて、親子それぞれの思いを考えることができて良かった。

◎お知らせ◎

昨年度の「障害児の自立に向けた社会生活体験事業」(独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成)の「社会生活体験プログラム」の実践記録を冊子にまとめました。

「社会生活体験プログラム事業報告書

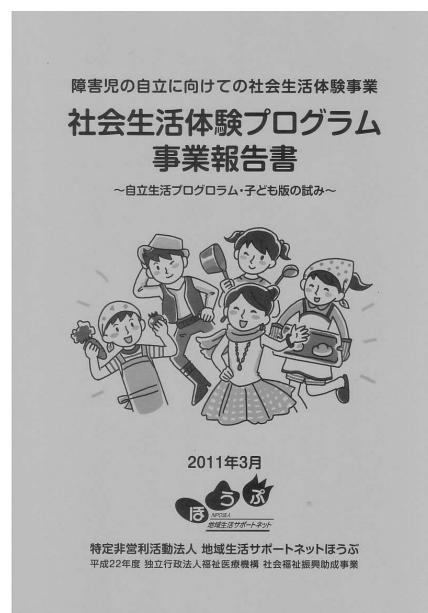
～自立生活プログラム 子ども版の試み～(80頁)

ご希望の方にお渡ししています。是非ともご覧いただき、ご意見やご助言をいただければありがたく思います。

本事業は多くの団体・機関、ボランティアとの協働によるものであり、試行錯誤をともに重ねる機会をいただきましたことを改めて感謝申し上げます

★申込先・問い合わせ先

NPO 法人 地域生活サポートネットほうぶ



自然の猛威を前にして、人間のいのちと生活の脆さが突きつけられた事態となりました。このような事態に対して小規模の本法人の出来ることは無きに等しいのですが、ひとりひとりのいのちに寄り添いながら、互いのいのちが活かされあうような関係を育む実践を身近な場所で重ねていく先に、ひとりでも多くの人と希望を分かち合いたいという思いを強くしているところです。被災地を暖かな春の風が包む日が早くやってくることを願って。

